

日本・アジアのキリスト教—無教会キリスト教の系譜(1)

芦名定道

<演習の目的・概要>

日本・アジアのキリスト教の歴史を振り返りつつ、その新しい思想的可能性を探ることは、日本におけるキリスト教思想研究にとって重要な意味を有している。この演習では、今年度以降、無教会キリスト教の思想家たちを順次検討してゆくことによって、近代キリスト教思想の重要な局面の解明がめざされる。今年度は無教会キリスト教の創始者である内村鑑三を取り上げる。特に内村の中心的思想である非戦論について、その基本的テキストを精読したい。

本年度は、内村鑑三の中心思想のうち、特に非戦論に焦点をあわせつつ、内村のキリスト教思想の特徴とその意義について議論を行いたい。その際に、内村を、キリスト教思想史における戦争・平和論（絶対平和思想、正戦論、聖戦論の諸類型。19世紀以降の国民国家のなかでのキリスト教）の中に位置づけると共に、内村以降の矢内原忠雄、南原繁、政池仁ら無教会第二世代への思想展開に留意する。そのために、内村自身の基本テキストの精読とそれに基づく思想分析がなされ、あわせて、さまざまな参考文献（内村についての欧米の研究文献を含めて）を参照しつつ、議論が行われる。

具体的な演習の進め方については、初回のオリエンテーションで詳細が説明される。

<演習のスケジュールと場所>

演習日（前期）：4/10, 17, 24, 5/1, 15, 22, 29, 6/5, 12, 19, 26, 7/3, 10, 17, 24

場所：8演（→キリスト教学研究室？）

- ・4/10：オリエンテーション（本日）
- ・4/17：講義「キリスト教の平和思想・戦争論」＋担当者確定、テキストの配付
- ・演習は4/24より開始。
- ・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
- ・必要な解説を行う（芦名）。
- ・成績はゼミでの発表（少なくとも前期後期一回ずつ）によって評価する。

<テキスト>

- ・前期：『内村鑑三選集2 非戦論』岩波書店。
宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社、1978年。
- ・後期：後日説明

<内村鑑三の略歴的説明>

- ・1861-1930
- ・無教会主義キリスト教の伝道者、思想家。
- ・1877年に札幌農学校に入学、「イエスを信ずる者の契約」（クラーク）に署名。1878年にハリス（メソジスト監督教会）より受洗。
- ・84年にアメリカに渡る。児童施設の看護夫として働く。85年にアマースト・カレッジ入学。86年にシーリー総長の感化で<回心>の体験。87年、ハートフォード神学校入学。
- ・88年、帰国。北越学館仮教頭を経て第一高等中学校に在任中に、91年1月9日に<不敬事件>をおこして退職
- ・97年より、「万朝報」英文欄記者。98年、「東京独立雑誌」主筆。1900年から「聖書之

研究」創刊。

- ・日露戦争に際して非戦論を唱える。第一世界大戦勃発後、再臨運動を展開。
- ・〈十字架教〉と称した福音信仰と2つのJ

<演習の背景・経緯>

- ・日本・アジアのキリスト教研究に向けて
 - ①東北アジア（朝鮮半島・日本・中国・台湾）のキリスト教
 - ②宣教師サイドからの視点との統合
 - ③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
 - ④アジアの固有の課題とキリスト教（アジアの近代史のコンテキストにおいて）
 - ⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
 - ⑥共同研究の実施
- ・日本キリスト教思想研究：近代日本とキリスト教思想との相互関連を中心に
 1. 2001年度の矢内原忠雄、2002年度の内村鑑三に続いて
 2. 近代日本（天皇制・民族主義）とキリスト教
 3. 明治期の日本キリスト教における神学の受容と形成
新神学論争、植村・海老名論争
 4. 2005年度から、植村正久と日本のキリスト教的宗教哲学（学問的キリスト教思想）の系譜
とくに、2006, 2007年度は、植村正久とその思想的展開（高倉徳太郎）
 5. 2008年度から2012年度まで、波多野精一。
- ・研究会との相互関係：研究拠点の形成に向けて
「アジアと宗教的多元性」研究会（現代キリスト教思想研究会）
『アジア・キリスト教・多元性』創刊号～第11号。
『比較宗教学への招待－東アジアの視点から－』晃洋書房 2006年

<日本キリスト教史の現状>

- ①通史の試み
 - ②個別教派・教団・教会の歴史編纂
 - ③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
 - ④人物研究（内村、新島、海老名、新渡戸、植村など）
 - ⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備
- 全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キリスト教研究としてまだ確立していない。
- 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（教文館）

<文献>

- より包括的な文献表としては、<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub8d.htm>、
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub9a1.htm> を参照。
- Barrett, Kurian, Johnson (eds.), *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press 2001
- Scott W.Sunquist (ed.), *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編 『アジアにおけるキリスト教比較表』（創文社）
日本基督教団出版局編 『アジア・キリスト教の歴史』（日本基督教団出版局）

- 富坂キリスト教センター 『鼓動する東アジアのキリスト教』(新教出版社)
- 鶴沼裕子 『史料による日本キリスト教史』(聖学院大学出版会)
- 隅谷三喜男 『日本プロテスタント史論』(新教出版社)
『近代日本の形成とキリスト教』(新教出版社)
- 出口光朔 『近代日本キリスト教の光と影』(教文館)
- 土肥昭夫 『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社)
『歴史の証言 日本プロテスタント・キリスト教史より』(教文館)
- 海老沢有道・大内三郎 『日本キリスト教史』(日本基督教団出版局)
- 中央大学人文科学研究所 『近代日本の形成と宗教問題』(中央大学出版部)
- 高橋昌郎 『明治のキリスト教』(吉川弘文館)
- 古屋安雄・大木英夫 『日本の神学』(ヨルダン社)
- 武田清子 『土着と背教 伝統的エトスとプロテスタント』(新教出版社)
- 古屋安雄他 『日本神学史』(ヨルダン社)
- 石田慶和 『日本の宗教哲学』(創文社)
- マーク・R・マリンズ 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』(トランスビュー)
-
- 近藤勝彦 『デモクラシーの神学思想 自由の伝統とプロテスタンティズム』(教文館)
(植村、内村、海老名、吉野作造、南原繁)
- 佐藤敏夫 『植村正久』(新教出版社)
- 大内三郎 『植村正久 生涯と思想』(日本キリスト教団出版局)
『植村正久論考』(新教出版社)
- 武田清子 『植村正久 その思想史的考察』(教文館)
- 雨宮栄一 『若き植村正久』『戦う植村正久』『牧師植村正久』(新教出版社)
- 崔 炳一 『近代日本の改革派キリスト教—植村正久と高倉徳太郎の思想史的研究—』
(花書院)
- 森岡清美 『明治キリスト教会形成の社会史』(東京大学出版会)
- 森本あんり 『アジア神学講義』(創文社)
- 徐正敏 『日韓キリスト教関係史研究』(日本キリスト教団出版局)
-
- 芦名定道 「日本の宗教状況と宗教間対話の可能性」、*Journal of the Institute of Asian Area Studies*, 釜山外国語大学 アジア地域研究所 2004年、1-18頁。
「東アジアの宗教状況とキリスト教—家族という視点から—」、
『アジア・キリスト教・多元性』創刊号 現代キリスト教思想研究会
2003年、1-17頁。
- 芦名定道・金文吉 「死者儀礼から見た宗教的多元性—日本と韓国におけるキリスト教の比較より—」、『人文知の新たな総合に向けて (21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」)』第二回報告書Ⅲ[哲学篇2] 2004年、5-23頁。
- 「アジア・キリスト教研究に向けて(1)」、
『アジア・キリスト教・多元性』第3号 現代キリスト教思想研究会
2005年、71-88頁。
- 「アジア・キリスト教研究に向けて(2)」、
『アジア・キリスト教・多元性』第4号 現代キリスト教思想研究会
2006年、43-62頁。
- 「植村正久とキリスト教弁証論の課題」、
『アジア・キリスト教・多元性』第5号 現代キリスト教思想研究会
2007年、1-22頁。
- 「植村正久の日本論(1)—近代日本とキリスト教—」、

- 『アジア・キリスト教・多元性』第6号 現代キリスト教思想研究会
2008年、1-24頁。
- 「植村正久の日本論（2）—日本的伝統とキリスト教—」、
『アジア・キリスト教・多元性』第7号 現代キリスト教思想研究会
2009年、1-20頁。
- 「韓国キリスト教の死者儀礼」、『東アジアの死者の行方と葬儀』勉誠出版、
2009年、96-104頁。
- 『『アジアのキリスト教』研究に向けて—序論的考察—』、
『アジア・キリスト教・多元性』第8号 現代キリスト教思想研究会
2010年、79-104頁。
- 「日本の宗教哲学とその諸問題—波多野、有賀、北森—」、
『アジア・キリスト教・多元性』第9号 現代キリスト教思想研究会
2011年、89-111頁。
- 「思想史研究の諸問題—近代日本のキリスト教思想研究から」
『アジア・キリスト教・多元性』第10号 現代キリスト教思想研究会
2012年、1-18頁。
- 「宗教的実在と象徴—波多野とティリッヒ」
『近代/ポスト近代とキリスト教』現代キリスト教研究会
2012年、3-21頁。
- 「日本キリスト教思想史と方法論的諸問題」
『アジア・キリスト教・多元性』第11号 現代キリスト教思想研究会
2013年（予定）。

<研究ノート>

内村鑑三と聖書

以下、『内村鑑三選集7 聖書のはなし』（岩波書店）に所収の諸論文によって、内村と聖書との関わりを、いくつかの視点より、論じてみたい。その内容としては、次に示す項目が含まれる。1（範囲の確定）→2（基礎作業）→3（整理から分析へ）という進展は、思想研究の展開プロセスを具体的に示したものである。なお、これは、2002年度の京都大学大学院文学研究科における演習（日本・アジアのキリスト教）が、もとになっており、その前期授業の総括のために作成されたものである。したがって、これは論文というよりも、覚書き・ノートとして、お読みいただきたい。

<内村鑑三選集7・文献>

- (1) 文学としての聖書（明治31年3月28日）
- (2) 聖書の話（明治33年9月30日～34年1月22日）
- (3) 聖書（明治33年12月21/23/27日）
- (4) 聖書は如何なる意味に於て神の言辞なる耶（明治35年4月20日）
- (5) 余の聖書（明治35年6月14/15/16日）
- (6) 三条の金線（明治36年4月23日）
- (7) 聖書は果して神の言なる乎（明治37年1月21日）
- (8) 聖書とキリスト（明治37年9月22日）
- (9) 聖書の真髓（明治37年11月17日）
- (10) 大阪講演の要点（明治39年12月10日）
- (11) 聖書の研究法に就て（明治40年3月10日）
- (12) 健全なる聖書研究（明治40年5月10日）
- (13) 高等批評に就て（明治41年9月10日）

- (14) 新約聖書に現はれたる思想の系統 (明治 43 年 12 月 10 日)
- (15) 新約聖書の預言的分子 (明治 44 年 5 月 10 日)
- (16) 聖書研究の話 (明治 44 年 8 月 10 日)
- (17) 艦隊として見たる新約聖書 (大正元年 11 月 10 日)
- (18) 聖書は如何にして成りし乎 (大正 5 年 4 月 10 日)
- (19) 聖書研究の目的 (大正 5 年 5 月 10 日)
- (20) 日本に於ける聖書の研究 (大正 5 年 6 月 10 日)
- (21) 聖書の読方 (大正 5 年 11 月 10 日)
- (22) 聖書の欠点 (大正 6 年 1 月 10 日)
- (23) 聖書の預言的研究 (大正 7 年 1 月 10 日、2 月 10 日)
- (24) 三条の縄 (大正 7 年 6 月 10 日)
- (25) 聖書全部神言論 (大正 7 年 11 月 10 日)
- (26) 聖書無謬説に就て (大正 8 年 9 月 10 日、10 月 10 日)
- (27) 聖書の中心に就て (昭和 3 年 8 月 10 日)
- (28) 聖書と基督教 (昭和 3 年 8 月 10 日)

3. 内村鑑三の聖書論

以下、記号 (a/b) は、文献表の a 文献の b 頁 (『内村鑑三選集 7 聖書のはなし』の頁) を、つまり、たとえば、(1/4) は、文献表の第一番目の文献「文学としての聖書」の 4 頁を意味している。また、(a) という表記は、頁ではなく、文献番号を意味している。なお、以下の内村の聖書論についての分析は、論文として仕上げられた議論を示すというよりも、議論を整理するための覚書き・ノートとして書かれていることを了解いただきたい。

<研究ノート・内容>

- I 聖書本質論
- II 聖書解釈学
- III コンテキストとレトリック
- IV 宗教と科学

I 聖書本質論 (= 聖書とは何か)

1. 聖書の二重性

「神の聖旨を人の手を以て写したるもの、是が聖書であります。

聖書は神の心を伝へた書であります。」(2/26)

内村の聖書理解の基本は、聖書が「人の手」と「神の聖旨」の二重性を持つ、という点に認められる。「神の聖旨」は「神の心」「神の言」「神の言辞」「聖書の精神」「聖書の理想」などとも言われるが、しかし、その一方で聖書も「人の手」によるかぎり、齟齬や内的矛盾、誤謬を免れていない (聖書の不完全性)。したがって、聖書が神の言であり、無謬であると言う場合 (聖書無謬説)、それは説明を必要とすることになる (25/227)。内村のテキストには、「聖書は不完全である」(「聖書の無謬説を唱ふるものではありません」(28/313)) と「聖書は無謬である」(「余は聖書の無謬を信ずる」(25/226)、「事物の宗教的意義を示す上に於ては少しも誤りません」(7/90)) という一見、矛盾した主張が見られるが、これは聖書の二重性のいずれに焦点を当てるかによって生じたものと解することができるであろう。さらに、この聖書の二重性 (神の言にして、人間の言) は、神学的には、キリスト両性論に基礎づけられると言えよう。今回取り上げた文献の範囲では、このキリスト論を内村が如何に理解しているかは不明であるが、内村がナザレのイエスと再臨のキリストの両方を視野に入れていることは明らかである。

2. 聖書自体が崇拜対象ではない。キリスト>聖書>教会 (教派)

まず、聖書は教会（教派の組織・思想・儀礼など）に優先する。もちろん、歴史的には聖書が教会において形成されたことを、内村も認める（18/181）。しかし、「聖書は教会に拠って立つ者ではない、教会が聖書に拠って立つ者である」（10/126）。歴史的なキリスト教会や伝統的な諸教派への批判、あるいは聖書によるそれらの相対化は（16/170）、宣教師への依存の脱却と共に、内村の無教会主義の立場を示すものと言えよう。したがって聖書研究は、教派的伝統から自由に行われる「自由研究法」（10/127）でなければならない。しかし、これは教派主義を聖書教（聖書という書物の崇拜）に置き換えたものではない。これはすでに見たように内村が単純な聖書無謬説を取っていないこと、また以下論じるように近代聖書学における科学的分析的な聖書学を一定の範囲内ではあるが、高く評価していることにも現われている。しかし、ここで確認したいのは、こうした聖書の相対化が、キリストとの関わりで為されていることである。「キリストが解るまでは聖書は解らない、キリストは聖書の精神であって、聖書以上である」（8/108）、「聖書はイエスキリストに就て証するものあること」（9/112）、「聖書の要点はキリストの十字架に在ると云ひて正鵠を失はないと信ずる」「それは活けるキリストである」（27/310）。この聖書の主人公としてのキリスト（14/150）は、聖書という書物を超えた、人類的また宇宙的な実在（「人類宇宙通有の生命」（19/186））であって、聖書研究の目的はこの生命であるイエスを聖書を通して知ることにあるのである（19/186、14/150）。したがって、イエスの生命は「恒久不変」であっても、書物としての聖書自体は永遠ではない（14/151）。「神の言辭は旧約三九卷新約二九卷位にて書き尽くされるものではありません」（4/66）、「天国に在りては聖書は要らない」（14/151）。

3. 聖書テキストの統一性

書物としての聖書がキリスト教共同体において形成された諸文書の集成であることは、内村の聖書理解の前提である。「是れは文集でありまして文学であります」（9/109）。これに類似した主張は内村のテキストの随所に見られるが、ここで生じる問題は、では、聖書は単なる「寄せ集め」（9/109）、「偶然に一書して綴られた書」（9/111）に過ぎないのか、ということである。つまり、聖書の統一性の問題である。ここでは、まず、聖書の統一性を内村がどのように論じているのかを、次にその統一的な聖書の内容がいかんか説明されているのか、をまとめてみよう。

まず、聖書の統一性であるが、内村は、新約聖書の読み方の多様性に関連して、「其見方の異なるは見る人の立場と人とが異なるからである」（14/150）と述べている（cf. 2/47）。つまり、読み手、解釈者との関係を離れて、その意味で客観的な仕方で、66の文書からなる聖書の統一性を論じることにはできない。問われるのは、「聖書六十六卷は一つの完備せる書である、之を一つのオルガニズム即ち有機体として見る事が出来る」（27/308）という場合の、「～として見る」という解釈学的視点である。これを内村は、聖書の精髓、要点、中心と呼んでいる。もちろん、理解しようとする対象を統一的に把握する視点としての中心は、客観的に存在するわけではなく、内村にあっては、それは、聖書の諸文書の中心を活けるキリストとして把握すること（＝信仰）によって、始めて可能となっていると言わねばならない（聖書は「信仰的に見れば完全無欠の書」、「聖霊に由りて」、神のことを知る機能としての「良心」「改悔めたる心」（11/131））。ここで我々は、次に論じる聖書解釈学の問題に踏み込むことになるが、聖書の統一性とは、読み手の実験において確認される、テキストの中心と読み手の視点（信仰）との相関関係の問題と言えらるであろう。つまり、読み手の関与と切り離して統一性が存在するわけではない。しかし、それは信仰者個人の主観の産物でもないのである（討論可能な相互主観的な構造を有するという点で）。内村の聖書理解は、内容的に現代の解釈学の問題に密接に関わり合っていると言えよう（聖書理解に関する「同情」の意義の指摘など（22/206））。

次に、統一的に把握された聖書の内容であるが、内村は、通読によって大略を知ることの必要性を指摘するだけでなく（2/34-35）、様々な観点から、その統一性を具体的に論じ

ている。ここでは、内村の聖書神学の内容には踏み込まず、思想的な統一性に関して、いくつかの議論を紹介するにとどめたい。

たとえば、内村は、伝道という視点から、人々をキリスト教に回心させるための戦略として、新約聖書を「艦隊」にたとえている(17/178)。つまり、聖書の諸文書は、一様な統一性において見られるのではなく、構造的な統一性(有機体)として捉えられるのであり、特に内村は、三という数によって、聖書の思想構造を様々な観点から分析している。

(a) 「三条の金線」としての信、望、愛(6)

「三条の金の糸が聖書を其始めから終りまで貫いております」(6/80)

(b) 新約聖書の思想的な「三系統」としてのヤコブ系、パウロ系、ヨハネ系(14)

「使徒ヤコブは実践的である、使徒パウロは信仰的である、使徒ヨハネは心霊的である」、「モーセは律法の根である、ヤコブは基督教の幹と枝である、パウロは基督教の葉と花である、而してヨハネは基督教の熟したる実である」(14/143)

(c) 聖書の「三つの部分・分子」としての歴史、教訓、預言(15)

「聖書は三つの部分より成る、其第一は歴史である、其第二は教訓である、其第三は預言である」、「聖書は其全体の組織に於て三分的である」「歴史的分子、教訓的分子、預言的分子」(15/153)

(d) 「三条の縄」(24)

「聖書は歴史であり、実験であり、預言である」(24/217)

まず、(a)は、いわゆるキリスト教的三徳という観点から議論であるが、注目すべきは、この三徳が、旧約から新約のすべてのテキストの三重構造を示すものであるとともに、信仰から希望、そして愛という「信仰的生涯の順序」(6/81)でもあるという点である。テキストには、共通構造(三重構造)と強調点における進展(多様性とその系譜)が存在し、それが、さらに信仰者の信仰プロセスと関連しているのである。同様の構造は、(b)において、キリスト教の歴史的展開というレベルとの関連において論じられる(ヘーゲルの影響による原始キリスト教の発展図式との対応は興味深い。ペテロからパウロ、そしてヨハネへ)。この聖書の三分子は、新約聖書の諸テキストを系統づける構造であると共に、「神の黙示」の「漸進的」な進展(ユダヤ人から異邦人、そして全人類へ)を示しており(14/143)、こうして読み手は、漠然と聖書を通読するのではなく、「我等は先づ聖書を其思想の系統に循つて究むべきである」(14/149)と勧められるのである。次に、(c)と(d)であるが、これらは、基本的に同一の視点からの議論であり、旧約聖書学で言う、律法・歴史文学、知恵文学、預言書という文学ジャンルに相当するものと言える。しかし、ここでも、あるテキストがどのジャンルに属するのか(=三つの「部分」)、ということよりも、すべてのテキストが三つの「分子」を有することが議論のポイントである。内村が強調するのは、通常歴史や教訓として区分されるテキストが預言でもあるということであり、具体的には、「山上の垂訓」はこうした点からその預言としての意義が詳しく論じられている。また、歴史、教訓、預言は、聖書の時間構造(過去、現在、未来)を表現している点にも留意すべきであろう。「過去の事実(歴史)に其基礎を置き、未来の希望(預言)に其実現を期する道徳である」(15/152)。

II 聖書解釈学(聖書をいかに読み・解釈し・研究するのか)

内村の聖書本質論に続いて、彼の聖書解釈学へ議論を進めよう。ここでの議論も二重性によって規定されている。以下、この二重性をインスピレーションと聖書学というテーマに関して説明し、内村の聖書解釈学の基本的立場を明らかにし、合わせて、内村が学んだ聖書学の内容、聖書の思想と諸学との関わりも論じることにはしたい。

1. インスピレーション

先に、聖書とは何かという問題との関連において、聖書の読み方・見方の問題に言及され

たが(聖書の諸文書における統一性の認識は、読み手の視点に相関していた)、これは、まさに聖書解釈学の問いに他ならない。つまり、聖書本質論は聖書解釈学を要求するのである。

内村鑑三の聖書解釈の基本にあるのは、霊あるいはインスピレーションの問題である。つまり、霊を霊によって理解するという考えである。まず、聖書に関して問題となるインスピレーションは、聖書テキストの成立について、つまり、聖書が神の靈感によって成ったという伝統的議論に対応するものとして展開される。

「聖書のインスピレーションとは神の霊が人の霊に降て之を活発せて事を為さしめると云ふ事であります」、「神の霊が人の霊に降て、人をして自由に書かせたものであります」、「霊は相互に合一することが出来るものであります」(7/104)

しかし、霊の問題は、人間の手による聖書テキストの形成と神の霊の働きとの関わりについてだけでなく、聖書を理解する場合にも問題となる。聖書は神の霊と霊的に合一した人間の手によるものであって、それゆえに、聖書は霊的なものであるとするならば、霊的な聖書を適切に理解するにも、霊的な一致が重要な意味を持つことになるはずである。内村は、「聖書は精神の書でありますから、我が精神さへ聖書の精神に合へば之を学ぶのは至て易い事であります。」(2/36)と述べているが、これは、聖書理解が聖書の精神と読み手の精神の一致、つまり霊的な一致を意味していると解することができるように思われる。

「霊のみが霊なる神を認ることが出来ます」(4/66)、「聖霊に由て書かれた聖書は聖霊に由らざれば如何にしても判明らない」(11/131)。こうした聖書の成立と読解におけるインスピレーションの問題は、内村においても、パウロ以来の伝統的な「文字と霊」という議論に関わっている。

「聖書は神の言辭であります、即ち神の心を私共に伝ふる書であります、然しながら心は文学ではありません、心は文字に於て顕はるる者であります、即ち文字の中に含まれ居る者であります、私共は聖書の不完全なる文字の中に完全なる神の心を探るのであります、是れ即ち聖書研究の目的であります」、「聖書其物は普通の書物と少しも異なりません」、「其紙とインキとの中に匿れて居る真理を発掘して始めて聖書が神の言辭となるのであります。」(4/70)

こうして、文字としての聖書テキストとそこに表現された神の心・精神を理解すること、あるいは人間の手になる聖書が神の言葉になること、これが、聖書解釈の問題であり、聖書研究はそれに向けた作業として位置づけられるのである。

以上より、聖書との関わりにおけるインスピレーション理解は、次のような二重性を有することになる。それは、一方における聖書理解のためのインスピレーションの必要性についての確認と、他方におけるインスピレーションの過剰に対する注意の喚起である。内村は、伝統的な靈感説を取る点で、近代聖書学の原理と一線を画しているが、それは、霊的な熱狂主義や逐語靈感説的な原理主義とも、区別されねばならない。「私は斯く云ふて聖書の無謬説を唱ふるのではありません、聖書は一言一句悉く神の言なりと云ふのではありません」(28/313)。この見解は、感情の過剰に対する批判に関連していると考えてよいであろう。すなわち、

「感情は之を人より得べきではない、直に之を神より得べきである」、「故に感情的の説教や演説は成るべく避くべきである」、「所謂は信心的書類は甚だ危険なる書である、読書は成るべく丈け乾燥無味なるを良とする」(12/135)。もちろん、あらゆる意味における感情が否定されているわけではない。問題は感情から真理が理解されるのではなく、真理の理解にこそそれにふさわしい感情が伴うということなのである。「然しながら斯かる研究に由て神の真理は会得せらるるのである、爾うして一たび神の真理を会得したる以上は清き感情(寧ろ感想)は滾々として我等の心裡より湧出づるのである」(12/136)。

こうして、議論は聖書研究の方法論、つまり聖書学へと展開することになる。内村が主張する適切な聖書研究とは、過度の感情を抑制した「静かなる敬虔深き科学的の研究」であり、その点で、いわゆる「リバイバル的の聖書研究法は成るべく避くべきである」とき

れるのである(12/136)。

聖書学の評価へ議論を進める前に、聖書解釈の二重性として、もう一つ例を挙げておこう。それは、聖書理解は困難であり研究を要する(2/34)、しかし同時に、容易であるという二重性である。以下に具体的に見るように、「聖書を十分に解釈致しするものは随分六ヶ敷い事であり」(2/33)、それ相応の努力を必要とする。「私共は先づ学者の態度を以て之に臨まねばなりませぬ、信者の間には聖書は神の御詞であるが故に誰にでも直にわかるものであると考へる人々もあります、其熱心は諒すべきものでありますが併し之は誤まれる考であると云はねばなりませぬ」(16/170)。しかし、同時に忘れてならないのは、聖書研究は聖書についての価値判断(神の言葉であるか否か)については、いわば中立的なものであり、信仰を基礎づけるものではないこと、また聖書研究において要求される教養が信仰的な聖書理解を生み出すものではないということである。むしろ、研究を要するという主張の他方でなされるのは、聖書を理解することは、特定の教派に属していたり、特殊な教養を身につけたりしていることを前提にするのではなく、聖書は万人に開かれているという主張である。「聖書を以て世に所謂聖人君子なる者の読むべきものであると思ふのは大間違ひです。聖書は平民の書でありまして最も人情的の書であります」(2/28)、「聖書が聖書たるのは其が万人の書であるからでなくてはならない」、「能く解る書でなくてはならない」(5/77)。学者の態度を要する万人の書という一見すると矛盾した事態は、聖書解釈についてさらに考察を深めることを要求する。おそらく、この点において重要なのは、「実験」という概念であろう。この点に進む前に、内村の考える聖書研究の方法論の内容を具体的に見ておこう。

2. 聖書学、その役割と限界

内村による近代聖書学(とくに、高等批評)への評価は、信仰の敵ではないが、信仰を基礎づけるものでもない、と要約できるように思われる。明治41年の「高等批評に就て」に見られる次の文章は、こうした内村の聖書学理解をよく表している。

「緻密と忍耐と謙遜とを要する学究である、爾うして学究である故に信仰を起す者ではない、学究の達する所は蓋然である、信仰ではない、故に批評に由て神の存在に關はる信仰は否定されない」、「基督者は聖書に由て神を信ずる者ではない、神を信ずるに由て聖書を信ずる者である、聖書は信仰上の最大参考書である、併し其憑典ではない、批評の奏したる大なる功績の一つは聖書の文字に依る信仰を壊つたことである、神は靈であるから、彼は靈に由てのみ之を認めることが出来る」(13/139)。

「批評は学問であるから、学問の範囲を出てはならない」(13/139)と言われるように、聖書のより深い理解に向けた道具として、聖書学は現代人にとって必要かつ有効な手段であるものの、それに分を超えた過大な期待をかけることは間違っている。信仰にとって聖書学が有する意味に関しては、過小でもなく過大でもない、冷静な判断が必要なのである。この点で、内村の議論(その役割と限界)はバランスがとれたものと言えるであろう。しかしまた、内村の近代聖書学理解は、さらに次の点で、きわめて注目すべきものと言える。それは、近代聖書学あるいは自由主義神学における黙示的終末論(再臨、復活)の喪失という問題である。黙示的終末論については、ヴァイス、シュヴァイツァーによって19世紀末に始まった聖書学の転換が第一に指摘できる。しかし、こうした20世紀の聖書学を規定する新しい動向と類似した議論を、我々は内村において確認することができる。

「然るに今時の聖書研究は如何? 今時の聖書研究は大抵は来世抜きの研究である、所謂現代人が嫌ふ者にして来世問題の如きはない、……彼等は聖書を解釈するに方て成るべく之を倫理的に解釈せんとする、来世に關する聖書の記事は之れを心靈化せんとする」(21/203)、「基督者とは素々是等現代人の如き者ではなかつた」(21/204)。

「イエスは単に大教師ではない、神より人類の審判を委ねられ給ひし大審判者である」(21/214)。

新約聖書が描くイエスは、19世紀的な市民社会の道德の教師ではなく、来世について

の預言者として理解されねばならないのであって、近代的なキリスト教の問題点は、こうした預言する力の喪失にこそ存在しているのである。

「近代人の所謂道德の其説の美しきに拘らず人を化するの力なきは、彼等に此事実を視るの眼、即ち預言の力がないからである」(21/214)。

以上よりわかることは、聖書学および神学における黙示的終末論の再発見という、19世紀から20世紀にかけてのキリスト教思想の問題状況に、内村も立っているということである。そして、さらに内村の場合は、キリスト教の過去の思想として黙示的終末論(内村の言う「預言」)を再発見するだけでなく、近代の状況における黙示的終末論の積極的意義の主張にまで進んでいる。これは、古代と近代の差異を強調し、その上でイエスの宗教の倫理的意義を導出しようとするヴァイス、シュヴァイツァーとは、異なった立場と言わねばならない。いわば、内村で問われているのは、近代的な批判と懐疑を経た上で聖書的な預言の現実性を取り戻すこと(批判を経た素朴さ)であり、ここにこそ思想的な困難が存在しているのである。なぜなら、ここにおいては預言の現実性の強調と近代人であることとを一つの信仰において結合することが求められているからである。内村において、この困難を解決する場として機能しているのは、次に見る「実験」であったのではないだろうか。

3. 実験における了解

適切に用いられた聖書学が信仰を助けることはあるとしても、聖書学が信仰を生み出すことはない。これが内村の基本的見解であった。では、信仰はいかなる仕方でも生まれるのであろうか。もちろん、これについては、聖霊論などキリスト教神学的な議論も可能であるが、内村の場合は、「実験」がポイントであるように思われる。実際、「実験」という用語は、時期を問わず内村のテキストにおいて繰り返し現われている(3/33, 5/78, 7/98, 16/173, 19/187, 21/197, 25/232など)。それは、たとえば「余は聖書無謬を信ずる」(25/226)、「余は聖書に由りて始めて自己の罪人なる事を悟った」(25/232)とあるように、科学的あるいは歴史学的な実証とは別の次元にある神や自己に関わる根本的事実(実証可能な個々の事実の実証基盤に関わる事実)についての認識に関係している。この点で、内村の実験は、主体的真理とか実存的自己理解と言われる事柄に比較されるべきものと言えるかもしれない(ブルトマンとの比較研究)。しかし、ここでは、内村自身のテキストから、関連するいくつかの問題を指摘しておきたい。

まず、聖書のメッセージの事実性の認識は、歴史的証明によって可能になるのではなく、自分自身の実験による以外にないと語られる。「歴史的証明は如何に強くとも私共は之に由て私共の経験以外の事はどうしても信ずる事は出来ません」(7/100)。実際、「若し基督教が歴史的宗教である云ふ訳から歴史的証明を得るに非れば之を信ずることが出来ないと云ひますならば世に真面目に基督教を信ずる者は一人も無くなる訳であります、私は基督教を転覆するやうな歴史的事実の挙がる時は未来永劫決してないと思ひます」(7/98)。これは、聖書学が信仰を基礎づけないという先の議論と同じことを述べたものであるが、聖書解釈とは、聖書を学問的に解明する手続き・手法に尽きるのではなく、それは、聖書のメッセージを読み手の実存的自己理解に媒介する地点にまで進まねばならないのである。

次に、信仰者の実験は、聖書が神の言葉として理解されるという事態と相関している、あるいは実験は聖書が神の言葉となる場、聖書の預言が自己の主体的事実となる場と言える。「其紙とインキとの中に匿れて居る真理を発掘して始めて聖書が神の言辞となるのであります」(4/70)。聖書はいわゆる客観的実体的に神の言葉で「ある」のではなく、実験において、出来事的に神の言葉に「なる」と言わねばならない。これは、ブルトマン学派において、「言葉の出来事」と言われる問題である。このことを内村は、次のように具体的に示している。聖書が神の言葉であることがわかるのは、「然らば聖書は何にが故に神の言辞であるかと申しまするに、勿論其中に神にあらざれば到底語ることの出来ない事が書いてあるからであります」(4/66)。たとえば、「聖書は悪は自由意思を授けられたる人

類が任意的に其造主なる神を離たことであると云ひます、事甚だ簡明でありまするが其中に深遠にして量るべからざる所あります、私共は聖書の此告示を聞いて始めて罪惡の深源を暁る事が出来るのであります」(4/67)とあるような仕方で、人間が自らの罪を聖書的な意味で自覚するのは、実験において生じる出来事的事態であり、同様のことは、贖罪、愛、復活、再臨にも当てはまる。この実験こそが、信仰者が直接依拠できる事実なのである。「今日私共基督教信者が実験する事が事実であります以上は聖書に書いてある之に類したる事柄は少くとも其大躰に於ては必ず事実でなくてはならないからであります」(7/98)。聖書のメッセージの事実性は信仰者の実験的事実において確証される言つてよいであろう。

最後に、「実験」に関連して「良心」の働きを指摘しておきたい。「神のことを知るための機能は人の良心である」、「良心に由らずして人は神を知ることには出来ない」(11/132)。この場合の「良心」とは、実験的事実が信仰者の実存において生じるための場であり、神の言葉の出来事を受容するものとして機能している。こうした内村の「良心」理解を、キリスト教思想史の中に位置づけることは、おもしろい研究テーマと言えよう。

(以下省略、<http://tillich.web.fc2.com/sub12.html> を参照)

4. 聖書学の内容

5. 聖書と諸学

III コンテキストとレトリック

1. 思想的コンテキストとしての近代日本・日本人
2. 西洋文明の基盤としての聖書
3. 内村の思想的変化と歴史のコンテキスト

IV 宗教と科学

1. レトリックとしての科学
2. 信仰と科学との関係性
3. 自然神学と内村

<参考文献>

以下の文献は、内村の聖書論との関連にて、演習において紹介したものである。

1. 山口陽一「聖書と日本人の非戦論」
月本明男・佐藤研編 『聖書と日本人』大明堂 2000年
2. 土屋博「日本における聖書の受容とその機能の変化」
土屋博『教典になった宗教』北海道大学図書刊行会 2002年
3. 近藤勝彦「内村鑑三における再臨運動とデモクラシー批判の問題」
近藤勝彦『デモクラシーの神学思想 自由の伝統とプロテスタンティズム』教文館 2000年
4. 宮田光雄「近代日本のキリスト教平和思想—内村鑑三の非戦論」
宮田光雄『平和の思想史的研究』創文社 1978年
5. 内田芳明『現代に生きる内村鑑三』岩波書店 1991年
6. 関根正雄 『内村鑑三』清水書院 1967年